

ザ・ピープルとは

この法人は、自分たちが住むまちの問題を、自分たち自身が考え、その解決のため主体的に行動する、そうした住民の存在がこれからの地域を支える基盤であると考え、「住民主体のまちづくり」を進めることを大きな活動の目的とする。また、「地域」に対する意識を広げ、地球市民のひとりとして自分たちの果たすべき役割を担うことを目的とする。（定款より）

古着リサイクル



障がい者福祉



海外支援



住民主体のまちづくり

意識啓発



災害救援

発災直後から



2011年3月16日 活動開始
防寒着・靴の提供

2011年3月23日
ロールカーペットの配布
自主的な小名浜地区
各避難所支援のスタート



各避難所を巡回する御用聞きスタイルでの救援物資配布
物に溢れながらも必要な物資の手に入らない避難所での状況の改善
避難生活の長期化に伴う日常の生活を取り戻す為の要望への対応

(社) いわき市社会福祉協議会との連携 ボランティアセンター開設

津波被災者の要望に応えることのできる主体へ
いわき市小名浜地区災害ボランティアセンター
被災者に寄り添える立場へ
同地区復興支援ボランティアセンター



いわき特有の課題に取り組む

荒廃する農業

コミュニティの断絶

仕事と生き甲斐づくり

環境とエネルギーの問題



いわきオーガニックコットンプロジェクト

いわきオーガニックコットン事業の創出

・食用作物以外のものとして、オーガニックコットンを、スタディツアー参加者やボランティアの支援を得ながら栽培し、綿と綿実を生産し、「メイドインいわき・ふくしま」製品を開発し、農業の再興、六次産業化により、市民参加型のおわきの新たな産業の創出を行う。



いわき震災通信【ザピープル】

Vol. 53 【1月19日号】

皆様、

寒中お見舞い申し上げます。

今週初めから大変な寒波に覆われた日本列島。湘南の海岸線が真っ白に塗り替えられた映像を TV で見ながらも、いわきでは雨から少し雪に変わりかけたものの積もる事は殆どありませんでした。週半ばには岩手県一ノ関市まで出張で出掛けてきましたが、郡山市からは一面の銀世界が続いていました。今週に関して言えば、いわきは南の雪からも北の雪からも襲来を受けることの無かった稀有な土地でした。

いわきに研修やボランティアにお見えになる方に、いわきを称して「東北の湘南」と申し上げることが度々あります。今回に限って言えば、正に本物の湘南以上に温暖な気候であることを実証してくれたようです。

この気候を慕って、原発立地地域から県内外に避難された方々がいわきへ避難先を変更しようとしています。信じられないことですが、未だに応急仮設住宅の建設が続いているのです。今回市内小名浜地区に建設中のものは、仮設住宅としては初めての二階建てのものです。長期化を見越し、用地確保が難しくなることへの対応策でしょう。震災からもうすぐ2年。衣食住という生活の基本のひとつがまだ定まらない方々がいるのです。

いわき市内で活動する被災者支援団体が作ったネットワーク組織、「3.11 被災者を支援するいわき連絡協議会」(通称：みんぷく 今月22日にNPO法人化の予定です)に、私たちザ・ピープルも参加しています。そのみんぷくでは、子供・借上げ住宅入居者・防災という3つのキーワードを下に部会を立ち上げ、具体的な活動を組み立てていくことになりました。本会が所属しているのは、借上げ入居者支援部会。先日そのはじめての会合が持たれました。会合の冒頭話題に上ったのは、最近新聞報道された、いわき市役所本庁舎と常磐、内郷両公民館に震災と避難者を中傷する落書きがなされた事件でした。時間が経過することで、避難者と地域住民の間の問題が複雑化・深刻化してきているというのが、参加者の一致した見解でした。

いわき市民の津波・地震被災者の殆どと、双葉郡からの避難者24000名のうち仮設住宅に入居していない方の多くが、現在市内の借上げ住宅と呼ばれる県営や民間のアパート等に住んでいます。その方たちは、周辺住民とのトラブルを避けるため、ひっそりと暮らしているといえます。その方たちの情報は個人情報保護法という壁に阻まれ、被災者支援を行なっている主体であっても入手が難しく、未だに支援漏れが問題になっています。

例えば、いわき市内に仮設住宅を建設していない浪江町からも数多くの方が避難して来ていますが、町ではその方たちを繋ぐ為の個人情報をNPOなどに提出しないと決めています。理由は、宗教関連等のトラブルに町民が巻き込まれることを避けるため。行政とNPOとの信頼関係の欠如が生んだ結果でしょう。方や、岩手県では県が独自の判断として被災者リストの支援組織への提供を認めています。福島県と岩手県、何が違っているのでしょうか。行政とNPOとの良好な関係の構築のために…どこから始めればいいのか議論が続きました。

まずは私たちで出来ることを…と、現在も本会を含め市内4団体で運営されている被災者向けの交流サロンの継続運営と共に、市内の店舗や寺社といったスペースを活用させて頂いての寄り合い的場の拡大を行なっていくこと、そして地域の自治会長さんや民生委員の方たちとの連携を模索していくことになりました。一つ一つ着実に進めるしか手立てはないというのが、その場の結論でした。

いわきオーガニックコットンプロジェクトの1年目が終了間近です。各栽培地から収穫されたコットンについて、「らでいしゅぼーや」さんのご支援により、専門機関でのベクレルチェックを行なって頂きました。そして、全ての栽培地に関してND(不検出)との結果が先日もたらされました。移行率が低い作物であること、土壌や枝葉などに関しても心配な数値は出ていなかったことは承知していましたが、改めて収穫したコットンからNDとの結果を得られたことは、関わってきた全ての者に大きな安堵感を与えてくれました。

そして、先日おいで下さった首都圏からのボランティアツアーの皆さんの手を借りて、コットン株の抜き取り作業が始まりました。コットンの株は枝の伸びほどには地中深く根を張っておらず、女性

の力でも容易く抜きました。人の背丈ほど枝を伸ばした株でも、その根は数十センチほどで数も多くはありません。栽培の当初に「根を動かされることを嫌う作物です。根に負担をかけないように」と何度も説明を頂いていたことを改めて思い出しました。なるほどこの根では大きな負荷には耐えられそうもありません。1反ほどの面積の畑の株は見る見るうちに全て抜き取られ、次の堆肥化の作業準備にと麻縄で束ねられました。黒マルチだけが残った畑を、これから春までゆっくり休んで次の栽培に力を貸して欲しいと思って眺めてきました。

収穫されたコットンを綿と種に分ける為の綿繰り機が、漸く私たちの元に届きました。栽培地の提供も行なって下さっている木酢液の製造業者「木紅木」さんの空き倉庫に機械を設置させて頂き、今日から、綿繰りスタートです。今月中には綿繰りを終了して、綿は次の工程、紡績工場へと送られることとなります。農業から繊維産業へのバトンタッチです。希望のバトンを渡していくのです。



vol.56 【3月10日号】

皆様、

明日で東日本大震災から丸2年。

日曜日の今日は、いわき市内各地でさまざまな追悼や復興祈念の事業が催されていました。小名浜地区としては特別な事業を企画しませんでした。昨年引き続きボランティアに来て下さっている九州看護福祉大学の学生さんたちと一緒に、市内の薄磯地区で催された「千の凧に乗って」というイベントのお手伝いをさせて頂きました。市内の子供たちが思い思いの絵を描いた凧を持ち寄り、津波被災エリアである薄磯海岸で凧揚げをするイベントで、参加者は450名を越えました。

このイベントを支えているのは埼玉県春日部市の方たちで、クレヨンしんちゃんのバスに乗って応援部隊が駆けつけて下さいました。午前中、春を思わせる南からの風に乗って、凧たちはスイスイと青空を泳いでいましたが、お昼頃から次第に風が強まり、季節はずれの台風のような強風の中、テントが風に煽られて動き出し、肝を冷やす場面もありました。

参加家族の笑顔が弾ける昼食会場は、土台だけになってしまった住宅跡や防波堤にボランティアたちの手で花々の絵「ガレ花」を描いた一角に設けられました。「住宅の跡地を歩いてはいけません。釘などの金属が出ていたりして思わぬ怪我をする危険があります」とスタッフが子供たちに声をかけます。見回せば、こここにガラスの破片やさびた釘が顔を覗かせていました。2年前の痕跡がまだそこには残っていたのでした。そして、山際にあるお寺の墓地に、喪服の人の姿が途絶えることはありませんでした。

今日と明日をどう過ごすのか…。心のどこかに引っ掛かりがあるのは、これまで被災者支援という立場に身を置いてきたからなのでしょう。明日11日には、福島県からの会議の案内(なぜこの時を選んで、この時である必然性の無い会議が福島県の手で催されるのか、私には不思議でならないのですが…)に欠席の返事を差し上げて、小名浜地区交流サロンでその時を迎えることにしています。

3月11日午後2時46分。その時間を、仮設住宅や見直し住宅の一部屋で過ごすことに息苦しさを感ずる方があれば、サロンで一緒に過ごして差し上げたいと思っています。どなたもお見えにならないければ、それはそれでいいことでしょう。誰もが復興へと気持ちを前向きに出来ている訳ではないことを、私たちは忘れてはならないと思うのです。

震災後2年を経過して、未だに震災の影響で水が出ない地区がいわき市内に残っていると申し上げたら、皆さんは驚かれるかもしれません。震災の爪痕などどうの昔に片付けられて、津波被災エリア以外では殆ど残っていないように見えるいわき市内にあって、中山間地域の遠野町の奥には、一昨年4月に起きた直下型の大きな余震の影響で山から引いていた簡易水道の水脈が枯れ、復旧の目途さえ立っていない集落が3箇所残されています。戸数僅か数軒の集落では、大きな工事を行なうための資金確保は難しく、手をこまねくばかりで2年が過ぎたといいます。「いわきオーガニックコットンプロジェクト」での栽培を行なっている遠野町矢本地区の為朝集落14戸では、震災後1年8ヶ月で漸く簡易水道の復旧がなされました。しかし、より戸数の少ない高齢者ばかりが住む集落では、現状を変える術は無いといいます。「給水タンクを載せた車で毎日の水汲みが、未だに仕事になっています。飲料水はペットボトル頼みで、嘗て私たちのところで頂いた水も、そちらへ運んでいました。今後もペットボトルの水を提供して下さる方があれば、是非紹介してください。」為朝集落の折笠茂子さんは、先日援農体験に訪れたボランティアの皆さんを前に熱く語りました。2年近くにもなる、蛇口から水の出ない暮らし。ニュースになることの無い、震災の影響がここにあります。

私たち、ザ・ピープルは多くの方々に支えられて震災後の活動を進めることが出来ました。先日は「いわきオーガニックコットンプロジェクト」に、株式会社味の素冷凍食品様から900万円を超える寄付金を頂戴しました。クボタ様からは、ミニ耕運機や家庭菜園用の粉砕機を(社)いわき市社会福祉協議会を介してご提供頂きました。他にも本当に心温まる沢山のご支援を頂いて、事業を進めさせて頂いてきました。栽培へのお手伝い、援農体験ボランティアにお越しく下さる方々の輪も、大きな広がりを見せています。そして、小名浜地区復興支援ボランティアセンターの運営も、ここまでは何とか多くの方々の支えにより継続させることが出来ました。支えていただいていることのありがたさを、心から実感しています。本当にありがとうございます。

今、3年目に足を踏み入れるにあたって、ここからは自分たち自身の努力勝負なのだという思いを強くしています。震災体験の風化が問題視される一方、放射能汚染、そしてそれにまつわる風評被害は根強く残ろうとしています。更に、地域コミュニティの断絶といった問題は徐々に表面化しようとしています。3年目の課題を抱えながら、私たちは自分自身で立ち上がっていかねばならないでしょう。この街に希望を取り戻す為に…。

